

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2007～2009

課題番号：19402024

研究課題名(和文)：フィリピンにおける社会階層の動態と社会経済変化—市民社会・共同性創出の可能性—

研究課題名(英文)：Socio-Economic Change and Trend of Social Stratification: Emerging Civil-Society and Cooperativity

研究代表者

西村 知 (NISHIMURA SATORU)

鹿児島大学・法文学部・教授

研究者番号：20253388

研究成果の概要(和文)：

資産、所得の階層性が顕著なフィリピン社会において、下位の社会階層の国民が豊かな生活を構築するための潜在能力、エンタITLEメントの獲得において、各社会階層(上位、中位、下位)内のそれぞれの動態、そして階層を超えた共同性の形成が重要な役割を果たす。国民の多くが参加できる社会経済発展は、そのような階層を超えた社会経済的インターアクションによって西洋とは異なる、あらたな市民社会が形成されるかどうか依存している。そのような、「市民社会」、「共同性」がフィリピン社会において実際に現れているのかどうかを、研究代表者、連携研究者の学際的(経済学、政治学、文化人類学、社会学)フィールド調査によって明らかにする試みをおこなった。

その結果、このテーマを考察する場合には、階層に関わらず、資本、労働のグローバル化がフィリピン社会に影響を与え、特に、中・下位層において、差異化、複数化が進んでおり、共同性の形成のされかたも複雑化していることが確認された。

研究代表者の調査地であるルイシータ農場では、スペイン時代からの地主と農民・労働者とのパトロン・クライアント関係は形を変えながら継続している。その一方、農民・労働者の中には海外労働者からの送金や農園内の外資系企業に働く家族の意識変化の影響を受け、短期的には犠牲を払っても、雇用や賃金体系の透明性、権利を求める傾向が出てきている。しかし、血縁・地縁ともに脆弱な最下位層はそのような余裕はなく、再び地主層に不透明な温情関係を求める傾向にある。

この研究では、制度を必ずしも市場機能が合目的に働くためだけの存在にとらえず、土地の歴史や文化に影響を受け人々に運用される側面や、制度の生物学的変容過程を重視するホジソンを中心とした現代制度経済学が重要であることがわかった。また、人々の制度の運用の過程で必然的に生じる包摂・排除の過程はヤングらの社会学のアプローチが有効であることも確認された。

土地制度は他の制度と同じく岐路依存性が強いものではあるが、状況の変化によって、その形を変えている。このプロセスが真の経済開発につながっているかどうかどうかは、住民がホジソンのいう「理性的革命」を経ているのかどうか、あるいは特定のグループが排除されていないかどうか重要な試金石となる。

研究成果の概要(英文)：

In the Philippine society, where the hierarchical nature of the assets and income are remarkable, acquisition of capability and entitlement are very important for the economically lower class to improve their life. In order to realize it, the trend of each class (upper class, middle class and lower class) and emerging cooperativity over the

different classes play very important roles. The realization of economic development that most of the people can participate in depends on whether the new civil society which is different from that of the West is formed by a social economic interaction beyond such a hierarchy.

We tried to clarify the formation process of such a civil society, and cooperativity by interdisciplinary field studies (economics, political science, cultural anthropology, and sociology). As a result, we realized that globalization of capital and labor affects the Philippine society across the classes. Especially, differentiation and pluralization of the middle and low ranks are significant.

At the Hacienda Luisita, which is the field-study site of the research representative, the patron-client relation between the landowner and farmers/workers still continue from the Spanish times along with institutional changes, but a tendency to demand transparency and rights come out of the farmers/workers. This consciousness change of the farmers/workers working is influenced by the financial support of their family who work abroad, and the more liberal ideas of new generation who work for foreign capital firms inside the hacienda. They are willing to cost their short-term sacrifice for the better future. However, the poorest class who has no family/relative or territorial bonding to support tend to go back to the landowner and ask for benefits even though they know that the action is not favorable for them in a long run.

In the study, we found that the approach of Hodgson, a leading scholar of Modern Institutional Economic very useful, to understand the institutional change which is influenced by the history and culture of the place. His biological approach could also contribute a lot to understand the institutional change and its outcome.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度			
2006年度			
2007年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2008年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2009年度	3,300,000	990,000	4,290,000
総計	9,900,000	2,970,000	12,870,000

研究分野：開発経済学

科研費の分科・細目：社会科学・応用経済学

キーワード：フィリピン、共同性、市民社会、社会階層、社会経済変化、複数性

1. 研究開始当初の背景

本研究は、直接的には平成 13-14 年度および平成 16-18 年度科学研究費補助金による共同研究（「フィリピン地域社会経済の学際的研究—行為主体と制度的枠組みの相互作用を中心として—」（平成 13-14 年度、基盤研究（C）、研究代表者・西村知、3,500 千円、平成 16-18 年度、基盤研究 B「グローバル時代におけるフィリピン地方社会と制度—知

識・地方エリート・移動に関する学際的研究—」研究代表者・西村知、6,800 千円）での議論ならびに研究活動の進展を受けて立案されている。最初の研究（平成 13-14 年度）は、フィリピン国内のイロコス、中部ルソン、ビコール、ビサヤ、ミンダナオ各地域の農漁民を「行為主体」として設定し、この行為主体が「制度」と相互作用的關係に立ちながら地域社会経済を組み立てている様態を解明することを目的とした。この研究によって、

地域社会経済には労働力移動、生活向上のための情報へのアクセス、また国家予算の配分などの諸点において、国民経済・グローバル経済の枠組みが多大な影響を及ぼすことが明らかになった。その次の科研費による研究（平成16-18年度）は、前回科研費で得た行為主体の社会的行為という視点を、グローバル状況においても地域社会のなかで一定の作用をともなったものとして捉え、知識（情報）、人の移動などに焦点を当て研究課題にアプローチしている。この研究において研究グループが新しく得た視角は、地方社会の人々の生活（経済・社会・政治）が実際に変化する過程では社会階層内のそして階層間の「共同性」の創出の可能性が極めて重要であるということである。この視角が本研究の中心課題となっている。

2. 研究の目的

本研究はフィリピン社会における階層内部、階層を越えて創出される市民社会・共同性をフィリピン社会に真の経済開発の基礎となる民主主義をもたらすダイナミズムと捉える。そして、様々な社会階層（伝統的富裕層、新興富裕層、中間層、海外労働者、農民）、地方政府、宗教の役割を対象にした学際的な現地調査によって市民社会・共同性の萌芽、展開過程を解明することである。

3. 研究の方法

研究の方法は研究代表者と連携研究者による年度に一度の2週間から1月程度の各自の調査地における聞き取り調査とフィリピン大学、アテネオ・デ・マニラ大学、政府機関（農地改革省、農業省など）における文献・資料収集が主である。

このほかに、年度につき1～3回、国内での研究交流会を行い各自の研究の理解を深めた。また、電子メールを用いて密にコミュニケーションを図り、現地調査データ、文献の共有をおこなった。特に分野を超えて共有できる最近の研究動向が議論の中心的なテーマであった。

4. 研究成果

主な研究成果は、学際的な研究による研究代表者、連携研究者の間における分野を超えた研究の交流である。フィリピン社会経済がグローバリゼーションの影響を受けて階層を超えて共同性が生まれつつあることが確認されたが、研究メンバー間で、それぞれの

シェアの形は異なるものの、この研究成果にいたる過程で、次のような研究が学際・学融的にシェアされた。経済学では、現代制度学派ホジソン、セン、政治学ではコノリー（複数性）、社会学・犯罪学では、ヤング（排除・包摂の過程）、共同性に関しては、哲学分野のナンシー、社会学のエンゲストローム（ネットワークキング）などの議論が紹介され、これらを共有する試みがおこなわれた。

研究代表者の現地調査による研究成果は以下のとおりである。平成19年、20年、21年とフィリピン共和国、タルラック州のルイシータサトウキビ農園における土地問題に関する継続調査をおこない、以下のことが確認された。2004年の地主への雇用、賃上げを求めたストライキ、それに対する政府の発砲による死傷者を出した事件がきっかけとなり農業労働者が獲得した最高裁の決定である農地再配分は現在、地主側の一時差し止め請求のために実現していない。地主の豊富な資金を使った工作によって、労働者は耕作により農地有効利用の潜在能力を示すことが困難になっている。しかし、血縁、地縁を用いて一部の地域では、耕作が継続されている。主にグローバル化による農業労働者世帯の雇用、所得の複数化は、農園内の新しい共同性を生み出す過程にある。資料収集に関しては、平成22年2月に英国のロンドン大学経済学部において経済制度と社会経済変化の関係に関する新しい知見、アプローチを得るための作業をおこなった。ホジソン博士の講演会も聴講し、制度を文化的、生物学的視角から研究する方法を学んだ。研究連携者との研究会においては、引き続き、フィリピン社会変化を学際的に研究する可能性を模索した。その結果、グローバル化による、ナショナル・ローカルの局面の現れ方、行為主体の複数性および共同性の創出の過程を研究することが重要であることがわかった。また、社会経済変化における、一部の社会構成員の包摂・排除の過程を考察することは社会の質的变化を理解するうえで重要であることも確認された。

5. 主な発表論文など

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計14件）

① 西村知 (2009) 「フィリピンの社会経済変化—包摂と排除の経済進化過程—」『経済学論集』73号 PP. 91-106.

② 関 恒樹 (2009) 「トランスナショナルな社会空間における差異と共同性—フィリピン人ミドルクラス・アイデンティティに関する考察—」『文化人類学』（日本文化人類学会）

74 卷 3 号、1-24 頁.

③川田牧人(2008)「セブ市グアダルーペの聖母信仰をめぐる驚異の共同体」西村知編『グローバル時代におけるフィリピン社会 ―共同性と複数性―』鹿児島大学法文学部:39-61

④美甘信吾(2008)「ポスト・エドサ期のビジネス・コミュニティと政治」西村知編『グローバル時代における フィリピン社会 ―共同性と複数性―』鹿児島大学 法文学部:68-98.

⑤N. Fuwa (2007). “Pathways Out of Rural Poverty: A case study in Socio-Economic Mobility in the Rural Philippines.” Cambridge Journal of Economics. Vol. 31. 123-144.

〔学会発表〕(計 18 件)

①川田牧人(2009)「ポスト世俗化社会における人類学的方法 ―多元的文化相対主義の可能性―」日本文化人類学会第 43 回研究大会(於大阪国際交流センター).

②N. Fuwa (2008). “Rural Development, Poverty Reduction and CARP Implementation.” 第 6 回アジア農業経済学会 国際大会 (the 6th International Conference of the Asian Society of Agricultural Economists) 2008 年 8 月 30 日 於 マニラ・アジア経営大学院 (Asian Institute of Management).

③関恒樹「トランスナショナルな社会空間における差異と共同性の生成―フィリピン・マニラ首都圏の事例から」(日本文化人類学会第 42 回研究大会にて発表、2008 年 5 月 31 日、京都大学)

④Shingo Mikamo (2008) “The ‘development’ of political science: Which way now in the Philippines?” 8th International Conference on Philippine Studies (Quezon City, Manila, Philippines).

〔図書〕(計 6 件)

①川田牧人(2008)『環境民俗学』(山泰幸・古川彰と共編著)昭和堂.

②Balisacan and N. Fuwa (eds.) (2007). Reasserting the Rural Development Agenda: Lessons Learned and Emerging Challenges. Singapore and Los Baños: Institute of Southeast Asian Studies (ISEAS) and Southeast Asian Regional Center for Graduate Study and Research in Agriculture (SEARCA).

③関 恒樹(2007)『海域世界の民族誌―フィリピン島嶼部における移動・生計・アイデンティティ』(世界思想社).

〔グループページ〕

<http://groups.yahoo.co.jp/group/pinoyha pon/>

*議論の一部が公開されており、グループに興味のあるものをメンバーとすることができる。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西村 知 (NISHIMURA SATORU)
鹿児島大学・法文学部・教授
研究者番号: 20253388

(2) 研究分担者

(0 人)

(3) 連携研究者

(4 人)

川田牧人 (KAWADA MAKITO)
中京大学・現代社会学部・教授
研究者番号: 30260110

不破信彦 (FUWA NOBUHIKO)
千葉大学大学院・自然科学研究科・准教授
研究者番号: 90302538

美甘信吾 (MIKAMO SINGO)
信州大学・経済学部・准教授
研究者番号: 90377614

関 恒樹 (SEKI KOKI)
広島大学大学院・国際協力研究科・准教授
研究者番号: 30346530